



前提のキャンセルから生じる修辭的効果

小松原, 哲太

(Citation)

日本語用論学会大会発表論文集, 9:293-296

(Issue Date)

2014-11-03

(Resource Type)

conference paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008850>



前提のキャンセルから生じる修辭的効果

こまつばら てつた
小松原 哲太

京都大学大学院／日本学術振興会

komatsubara@hi.h.kyoto-u.ac.jp

< Abstract >

The aim of this paper is to describe a type of humor caused by a conflict between the conventional function of a presupposition marker and the self-evident fact in the situation: (to a native speaker of Japanese) *kimi no nihon-go marude neitibu mitai*. 'Your Japanese *almost* sounds like a native speaker's one.' This type of humor is called "misfire" effects, which originated in the term introduced by Austin (1962). This study is to show how a misfire of an utterance can be interpreted as humor in terms of speech act structure and cognitive processes.

【キーワード】: 不発、階層的認知、異化効果

本論文の目的は、例えば(1)における助動詞「みたい」のように、ある前提の成立を明示する標識を、その前提が明らかに成立しない文脈の下で使用することにもとづく修辭現象をとりあげ、認知語用論の立場からその表現効果のメカニズムを明らかにすることである。

(1) (受験生に対して)

そんなに勉強してたら受験生みたい。

本論文では、(1)にみられるタイプの修辭的効果を、発話行為論の用語になぞらえて、**不発効果 (misfire effects)** とよぶ。

本論文の構成は以下の通りである。1節では、前提のキャンセルの観点から不発効果の特徴づけを行う。2節では、発話行為論における「不発」の概念との関連で不発効果のもつ語用論的構造を分析し、3節では、その認知的動機づけとして、発話主体の間主観的階層的認知が関わることを示す。4節では、不発効果の修辭的機能に関する考察を行う。

1. 前提の状況的キャンセル

前提 (presupposition) は、発話が意味をなすための必要条件の一部であり、言語主体間の共通認識を構成する。場合によっては、前提が言語的に明示される場合もある。

(2) 直子は餅を食べたことを打ち明けた。

(3) あの男の勉強ぶりはまるで受験生のようだ。

(2) では、直子は餅を食べたことが前提され、(3) では、男は受験生でないことが前提される。

「打ち明けた」「まるで-ようだ」のような、ある前提を明示する標識は**前提トリガー (presupposition trigger; Levinson 1983: 181-185)** とよばれる。明示された前提は、否定によっても失われないことが知られている (Kiparsky and Kiparsky 1971[1968])。例えば「直子は餅を食べたことを打ち明けなかった。」としても、上述の前提が成り立つ。

一般に、前提は文脈からキャンセル可能 (defeasible) である (Levinson 1983: 186-191)。

- (4) 直子は餅を食べたことを私に打ち明けることはなかった。直子には身に覚えのないことであったからである。

(4) では、「打ち明ける」という前提トリガーが想起させる前提は、後続文脈によってキャンセルされ、前提は実は不成立であったことが明示されている。(4) の前提キャンセルは、否定辞「なかった」のスキープの多義性を利用したものであるが、(1) や次の事例では、前提が不成立であることが状況から自明であることにより、前提トリガーの前提構築機能がキャンセルされている。

- (5) (アメリカ人に対して)
彼の英語はまるでネイティブ・スピーカーのようだ。
- (6) (明日告白する友人に対して)
振られたことは黙っておいてやるよ。

(1)(5)(6) 等の語法は、状況的知識を利用したある種の冗談の型となっており、ユーモアに関わる修辭的効果を生じるものである。以下では、この独特の表現効果のメカニズムに関する分析をおこなっていく¹。

2. 不発効果

発話行為論の観点からみた場合、前提トリガーを適切に使用することは、間接的に前提命題を陳述するという側面をもつ。(1)(5)(6) のような事例では、話し手は前提の偽を知っているにも関わらず、あたかも真であるかのように述べる。これは不誠実な陳述であり、騙し (deceiving) と類似する発話行為の形式である。しかし (1)(5)(6) の事例では、前提の不成立は話し手聞き手の双方にとって自明であるため、実際に聞き手が文字通りの意味で前提を信じて、話し手に騙されるということはない。

騙しの失敗という観点から見ると、(1)(5)(6) のような前提の状況的キャンセルは、騙しの

発話行為の適切性条件 (felicity conditions) の一部が語用論的な状況から満たされず、不発 (misfire) に終わるとみなすことができる²。この意味で (1)(5)(6) にみられるような表現効果を不発効果 (misfire effects) とよぶ (cf. 小松原 2012: 18-20)。

不発効果を、騙し行為の失敗から生じる修辭的効果とみるならば、不発効果の語用論的構造は、騙しが適切に遂行される基準からの失敗、逸脱のパターンとして記述することができる。一般に、騙すという行為が適切に遂行されるためには、少なくとも以下の条件が満たされなければならない。

- (7) <騙し (deceiving) の適切性条件>
- a. S は P が偽であると信じている。
 - b. S は H に P が真であると信じさせることを意図している。
 - c. H は、P の真偽を知らない。
 - d. H は、発話により P が真と信じる。
- (S = 話し手, H = 聞き手, P = 命題内容)

不発効果の事例では、聞き手ベースの適切性条件 (7c)(7d) が状況から明らかに満たされていない。このことから、不発効果が生じるためには、少なくとも以下の条件が満たされる必要があると考えられる。

- (8) <不発効果の"不"適切性条件>
- a. H は、P が偽であると信じている。
 - b. H は、発話によって、P が真であると信じることはない。

以上より、不発効果は、次のような発話行為論的構造を背景とすると考えられる。

- (9) <不発効果の発話行為論的構造>
- S は、(7) に特徴づけられる騙し行為の発話行為シナリオにもとづいて発話するが、(8) により騙しは不発に終わる。

3. 不発効果の認知的動機づけ

不発効果は、前提の不成立の自明性を利用しているが、科学的な真理や社会的な常識として偽が信じられている命題では、不発効果が生じにくい傾向がみられる。

(10) 彼の英語はまるでネイティブ・スピーカーのようだ。

(11) ??太陽はまるで東から昇るようだ。

(12) ??日本の首都はまるで東京のようだ。

表 1：語用論的自明性

	文脈無し	文脈有り
(10)	真偽は不明	偽は自明
(11)(12)	偽は自明	偽は自明

(10) では、[彼はネイティブではない]という前提の真偽の自明性は面識の有無等の語用論的文脈によって異なるのに対し、(11)(12) の前提の偽は一般に自明である。

(10) が比況 (i.e. 比喻) の読みではなく、不発効果の読みとなる場合には (5) に括弧で付記したような文脈が必要となる。しかしその一方で、(7) を満たすためには、H にとってあたかも前提の真偽が不明であるかのように振る舞わなくてはならない (cf. (7c))。不発効果は、この S の役割の二重性に動機づけられている。

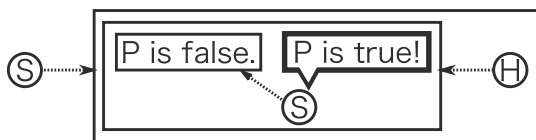


図 1：階層的認知

図 1 における外側の S は、文脈を考慮して自らの発言をメタ的に認知する話し手であり、内側の S は、H をあたかも騙そうとする振りをする話し手である。このとき H は、S は文字通りには前提 P が真であると述べているが、実際には P は偽であると信じているという S の二

面性を了解している。

不発効果が適切に機能するためには、図 1 に示す認知図式が話し手と聞き手の双方にとって間主観的に共有されている必要がある。話し手側からみると、不発効果の成立には、前提の偽を分かっているながら、それが真であるかのように演じるという、メタ発話行為的な認知プロセスが必要である。また、聞き手側からみると、不発効果の成立には、話し手の文字通りの言明が演技であることを見抜き、冗談として許容する解釈の認知プロセスが必要である。さらに言えば、双方は対話者の視点に立ったそれぞれの条件が満たされていることを互いに知っている必要がある。これらが満たされない場合には、話し手としては冗談のつもりが、(6) に対して第三者が「え、あの人振られたんですか」と本当に騙されてしまう場合や、(5) に対して「いや、あの人本当にネイティブなんですよ!」と話し手の勘違いをただそうとしてしまう場合も考えられる。これらの対話反応は、不発効果が意図されている場合には、ユーモアの"不発"となる。

4. 不発効果の修辭的機能

不発効果の事例では、言語表現の慣習的な意味がキャンセルされ、状況依存的な意味が前景化される。この慣習の意味と状況的意味の分化は、(13) に示す不発効果のもつ修辭的機能の二つの側面に関する動機づけとなる。

(13) <不発効果の修辭的機能>

- a. 異化：常識的に成り立つ前提をあたかも発見的事実として非常識化する。
- b. 無意味化：言語表現の慣習の意味を背景化し、無意味に近づける。

異化とは、反復による記号作用の自動化から主体を開放し、「ものをその名前で名指さず、はじめてみられたかのように描写し、また出来ごとを、はじめて起ったかのごとくに描き出す」(Shklovskii 1971[1925]: 119) 手法を

いい、ロシア・フォルマリズムの文学理論において、詩の手法として認識されてきた概念である。前提は、日常言語によっては名指されない、言語使用を支える常識的知識をなす命題 (e.g. "あなたはアメリカ人である") であるといえる。不発効果は、常識に埋没した前提命題を、常識とは異なる文脈と関連づけ、再提示することによって異化作用を生じる。

慣習的な意味機能を背景化し、言語の記号形式を形式自体として前景化する無意味化は、不発効果のもつ修辭的効果のベースをなす。ナンセンスは冗談の意味でも用いられることから示されるように、無意味化はユーモアの感覚と深い結びつきをもつ。不発効果では、前提の成立しない状況で前提トリガーを使用しナンセンスを演技的に実行する「内側の S」と、それを観覧する視点からナンセンスをメタ的に認識する「外側の S」とが区別される (cf. 図 1)。この S の二重役割にもとづく一人芝居の構図は、聞き手にフィクションの感覚を想起させ、より容易にユーモアを理解することを助けていると考えられる。

以上、前提トリガーの機能不全にもとづく修辭現象に関する検討を行ってきたが、従来の言語研究では、このタイプの事例はほとんど言及されていない。しかし、不発効果は日常生活における言語使用にしばしばみられる表現であるという点で、今後より体系的な記述とさらなる考察が必要であると考えられる。

注

1. Keenan (1971: 45) は、隠喩や冗談の解釈によって前提がキャンセルされうることを指摘している。
2. Austin (1962: 23) は、発話行為の不適切性の一つとして、不発を挙げている。例えば、*I name this ship the Mr. Stalin.* という命名行為の明示的遂行表現を、通りがかりの第三者が発話したときには、当該の行為は遂行されない。冗談と失敗は類似しており、この種の不発の典型事例からも、不発効果と類

似した語用論的効果が認められると考えられる。

参考文献

- Austin, J.L. 1962. *How to Do Things with Words*. London: Oxford University Press.
- Keenan, E.L. 1971. "Two Kinds of Presupposition in Natural Language." In C.J. Fillmore and D.T. Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*. 45-54. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky. 1971[1968]. Fact. In D.D. Steinberg and L.A. Jakobovits (eds.) *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Shklovskii, V.B. 1971[1925]. 「手法としての芸術」、『ロシア・フォルマリズム論集—詩的言語の分析』、108-137、東京: 現代思潮社. 磯谷孝訳.
- 小松原哲太. 2012. 「直喩の二側面と修辭的効果の二つのタイプ—助動詞「ようだ」に関する事例分析—」『言語科学論集』18、1-25、京都大学大学院人間・環境学研究科 言語科学講座.